

総合型選抜および学校推薦型選抜における知識・技能、 思考力・判断力・表現力等の評価材料の適切さについて

荒井 清佳, 椎名 久美子, 伊藤 圭, 桜井 裕仁 (大学入試センター), 大塚 雄作 (国際医療福祉大学)

総合型選抜および学校推薦型選抜における知識・技能、思考力・判断力・表現力等の評価方法に関して、令和 5 年度に実施された「大学入学者選抜試験の改善に向けた需要調査」の回答を集計し、分析した。評価材料の適切さについて各大学の回答者の考えを尋ねたところ、汎用的な能力を評価する場合には小論文や面接、口頭試問が、教科・科目に関する学力を評価する場合には大学個別の教科・科目別テストや面接、口頭試問が、それぞれ高かった。試験のタイプ別に見ると、教科・科目別の試験と履修を前提とする教科・科目を明示せずに汎用的な能力を評価する試験が 30%程度の大学で実施されていることが示された。

キーワード：教科・科目別テスト、汎用的な能力、アンケート調査

1 はじめに

1.1 総合型・学校推薦型選抜で用いられる評価材料

大学入学者選抜要項が令和 3 年度から見直され、それまでの AO 入試、推薦入試は総合型選抜、学校推薦型選抜となり、大学教育を受けるために必要な知識・技能、思考力・判断力・表現力も適切に評価することが求められる入試方法に変更された（文部科学省、2018）。具体的には、両選抜ともに、調査書（・推薦書）等の出願書類だけではなく、小論文等、プレゼンテーション、口頭試問、実技、各教科・科目に係るテスト、資格・検定試験の成績等又は大学入学共通テストのうち少なくともいずれか一つを必ず活用することとなった（文部科学省、2020、2023 年 6 月 2 日）。

総合型選抜・学校推薦型選抜で用いられている評価材料に関する調査には、大学入試センター研究開発部が令和 3 年（2021 年）秋に実施した「令和 3 年度大学入学者選抜における選抜資料の利用状況に関する実態調査」（大学入試センター研究開発部、2023）（以降、「実態調査」と略す）や令和 4 年度文部科学省委託調査「大学入学者選抜の実態の把握及び分析等に関する調査研究」（文部科学省、2023）がある。この二つの調査は回答者や質問内容が異なるが、どちらの調査でも出願書類を除くと面接・討論や小論文等が多く課されているという結果であった。しかし、どちらも各評価材料の利用の有無を調べたものであり、評価しようとする能力との関連を調べたものではない。

1.2 本論文の目的

総合型選抜・学校推薦型選抜に関して各大学の入学者選抜の改善への支援のあり方を検討しようとするとき、各大学が入学後の学修に必要な能力をどのような

評価材料を用いて評価しようとしているのかを把握することは不可欠である。たとえば、自大学の入試に向いていると思われているにもかかわらず、実施されていない試験方法があれば、その実施につながる何らかの支援策を検討する意義があると考えられる。

そのため、大学入試センター研究開発部が 2023 年 12 月～2024 年 1 月に実施した「大学入学者選抜試験の改善に向けた需要調査」¹⁾（大学入試センター研究開発部、2023）（以降、「需要調査」と略す）では、選抜で用いる評価材料と評価しようとする能力とを関連させた質問項目（2 節で詳述）を設けた。

本論文では、需要調査で得られた回答を分析し、総合型選抜・学校推薦型選抜において評価しようとする能力別にどのような評価材料が適切と捉えられているのか、また、試験の実施に関してどのような試験のタイプが向いていると考えられているのかを報告する。両選抜における各評価材料を、評価しようとする能力と関連させて把握することにより、各大学への支援のあり方を検討するための知見が得られると考えられる。

2 需要調査

2.1 需要調査の概要

需要調査は、各大学の入学者選抜試験の改善に活用可能と考えられるいくつかの方策に関して大学の実態や考えを尋ねることを目的に、令和 6 年度共通テスト利用大学を対象に大学入試センター研究開発部が実施した調査である。

回答は「貴大学の入学者選抜の実施方法等を研究・検討している部署の方等、貴大学の入学者選抜を総合的に把握しておられる方」に依頼し、学部数や選抜区分の数によらず、1 大学につき 1 通の回答とした。調

査の対象とした 764 大学のうち 538 大学から有効な回答が得られた（有効回答率 70.4%）。有効回答大学の設置形態別の内訳は、国立が 58 大学（10.8%）、公立が 84 大学（15.6%）、私立が 396 大学（73.6%）であった。

需要調査の質問項目はセクション A～F に分かれている。本論文では、総合型選抜および学校推薦型選抜における知識・技能、思考力・判断力・表現力等の評価に関して尋ねたセクション B に焦点を当てる。問題作成の手引きに関して尋ねたセクション D、問題バンクに関して尋ねたセクション E については、それぞれ椎名ほか（2025）、伊藤ほか（2025）を参照されたい。

2.2 回答大学

セクション B では、4 つの質問（QB-1～QB-4）について、総合型選抜や学校推薦型選抜を実施している大学に、それぞれの選抜区分に関して回答してもらった。

需要調査で有効回答を得られた 538 大学のうち、総合型選抜、学校推薦型選抜を実施している大学はそれぞれ 461 大学、534 大学であった。設置形態別にみると、国立、公立、私立大学はそれぞれ、総合型選抜では 46、40、375 大学、学校推薦型選抜では 54、84、396 大学であった。

表 1 には、私立大学をさらに学部数で 4 つに分けた区分別（1 学部、2 学部、3・4 学部、5 学部以上）の大学数を示した。なお、総合型選抜と学校推薦型選抜の両方を実施している大学は 458 大学、どちらも実施していない大学は 1 大学であった。

表 1 回答大学のうち、総合型選抜、学校推薦型選抜を実施している大学の数と割合

	総合型選抜		学校推薦型選抜	
	大学数	(%)	大学数	(%)
国立	46	(10.0)	54	(10.1)
公立	40	(8.7)	84	(15.7)
私立1学部	98	(21.3)	111	(20.8)
私立2学部	81	(17.6)	86	(16.1)
私立3・4学部	106	(23.0)	108	(20.2)
私立5学部以上	90	(19.5)	91	(17.0)
全体	461	(100.0)	534	(100.0)

2.3 知識・技能、思考力・判断力・表現力等の評価方法に関する質問の構成（セクション B）

セクション B は、4 つの質問（QB-1～QB-4）から構成されている。各質問項目の前提として「総合型選抜および学校推薦型選抜における知識・技能、思考力・判断力・表現力等の評価に関して、貴大学の実態を踏まえたあなたの考え等をうかがいます」と示し、各大学の回答者の考えを回答してもらった。

質問 QB-1 と QB-2 では、7 種類の評価の材料について、その適切さを尋ねた。7 種類の評価材料は実態調査の質問でも用いたものである。質問 QB-3 と QB-4 は 4 種類の試験のタイプについて、QB-3 では大学個別のテストとして向いているかどうか、QB-4 では回答者が所属する大学で実施しているかどうかを尋ねた。具体的な質問文は 3 節で示す。

3 分析結果

3.1 評価する能力に対する評価材料の適切さ（QB-1、QB-2）

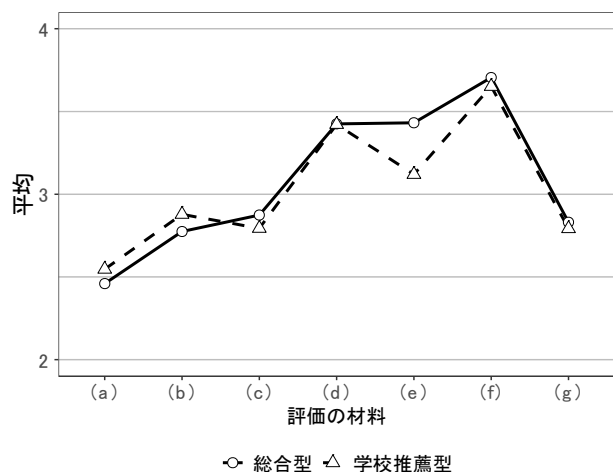
3.1.1 質問文

QB-1 と QB-2 は、(a)～(g)の 7 種類の評価の材料についての質問であった。QB-1 では汎用的な能力を評価すると想定した場合の評価材料の適切さについて、QB-2 では教科・科目に関する学力を評価すると想定した場合の評価材料の適切さについて、回答者の考えに当てはまる程度をそれぞれ「1. 適切ではない」「2. あまり適切ではない」「3. やや適切である」「4. 適切である」の 4 段階評定で尋ねた。質問文は次の通りである。

QB-1. 貴大学の総合型選抜や学校推薦型選抜において、入学後の学修に必要な汎用的な能力（例：論理的思考力等）を評価することを想定したときに、下記の(a)～(g)を評価の材料として用いることはどの程度適切と思われますか。あなたの考えに当てはまる程度を選抜区分ごとに一つずつ選択してください。

QB-2. 貴大学の総合型選抜や学校推薦型選抜において、高校までに履修した教科・科目に関して、入学後の学修に必要な学力を評価することを想定したときに、下記の(a)～(g)を評価の材料として用いることはどの程度適切と思われますか。あなたの考えに当てはまる程度を選抜区分ごとに一つずつ選択してください。

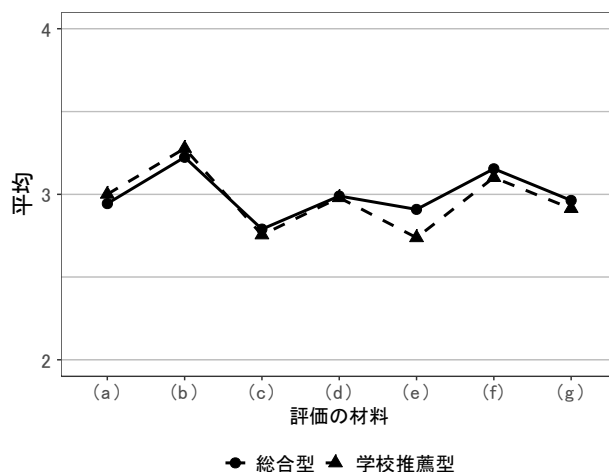
- (a) 大学入学共通テスト
- (b) 大学個別の教科・科目別テスト
- (c) 大学個別の非教科型テスト



(a) 共通テスト (b) 教科・科目別 (c) 非教科型 (d) 小論文
(e) プレゼン (f) 面接 (g) 資格試験

図1 汎用的な能力を評価すると想定した場合の評価材料の適切さ

- (d) 小論文
- (e) プレゼンテーション
- (f) 面接、口頭試問
- (g) 資格・検定試験の成績等



(a) 共通テスト (b) 教科・科目別 (c) 非教科型 (d) 小論文
(e) プレゼン (f) 面接 (g) 資格試験

図2 教科・科目に関する学力を評価すると想定した場合の評価材料の適切さ

3.1 であった。(a)大学入学共通テストはそれぞれ 2.9, 3.0 であり、高くなかった。7 つの評価材料の平均値の範囲は総合型選抜では 2.7～3.2, 学校推薦型選抜では 2.7～3.3 といずれも 3 前後であり、汎用的な能力を評価する場合と比べて評価材料による違いは小さかった。

3.1.2 選抜区分による評価材料の適切さの違い

QB-1 と QB-2 の 4 段階評定による回答を間隔尺度とみなして、各評価材料に対する評定の平均値を総合型選抜、学校推薦型選抜別に算出し、プロットした(図1, 図2)。

図1は、汎用的な能力を評価すると想定した場合の評価材料の適切さである。総合型選抜、学校推薦型選抜のどちらにおいても、(a)大学入学共通テストの平均値は 2.5 程度であるが、それ以外の評価材料はいずれも 2.5 よりも高く、(d)小論文、(e)プレゼンテーション、(f)面接、口頭試問では 3.0 以上であった。総合型選抜と学校推薦型選抜による平均値の違いは(e)を除いて小さかった。(e)については、総合型選抜では 3.4 と(d)と同程度に高いのに対し、学校推薦型選抜では 3.1 と低かった。

図2は、教科・科目に関する学力を評価すると想定した場合の評価材料の適切さである。総合型選抜と学校推薦型選抜による平均値の差は小さく、両選抜で同じような傾向であった。平均値が最も高いのは(b)大学個別の教科・科目別テストであり、総合型選抜では 3.2, 学校推薦型選抜では 3.3 であった。次に平均値が高いのは(f)面接、口頭試問であり、それぞれ 3.2,

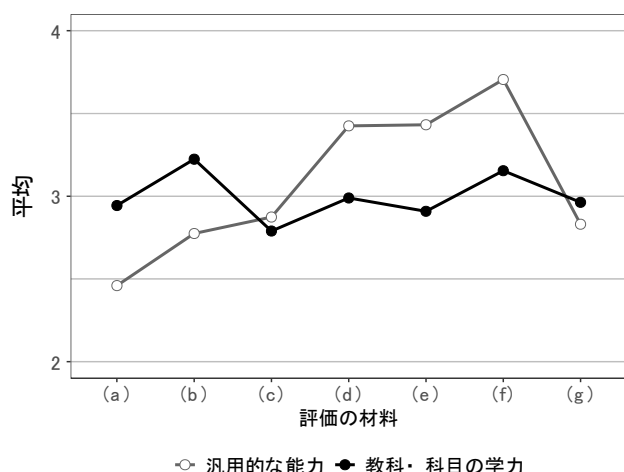
3.1.3 評価する能力による評価材料の適切さの違い

図3は、図1, 図2の総合型選抜についての折れ線グラフを重ねたものであり、評価すると想定した能力による評価材料の適切さの違いを総合型選抜について見たものである。

汎用的な能力を評価すると想定した場合には相対的に(d), (e), (f)の平均値が高く、教科・科目に関する学力を評価すると想定した場合には相対的に(a), (b)の平均値が高かった。(c)大学個別の非教科型テスト、(g)資格・検定試験の成績等については評価すると想定した能力による違いは小さかった。学校推薦型選抜についても総合型選抜と同様の結果であった。

3.1.4 属性別にみた評価材料の適切さの違い

図3の総合型選抜についての折れ線グラフを属性別に示したものが図4, 5である。また、学校推薦型選抜について同様に属性別に示したものが図6, 7である。図4, 6は汎用的な能力を評価すると想定した場合の、図5, 7は教科・科目に関する学力を評価すると想定した場合の評価材料の適切さの評定平均値である。属性としては、設置形態別(国立、公立、私立)



(a) 共通テスト (b) 教科・科目別 (c) 非教科型 (d) 小論文
(e) プレゼン (f) 面接 (g) 資格試験

図 3 評価する能力別にみた評価材料の適切さ（総合型選抜）

に加えて、私立大学をさらに学部数を基に 1 学部、2 学部、3・4 学部、5 学部以上の 4 つに分け、「国立」「公立」「私立 1 学部」「私立 2 学部」「私立 3・4 学部」「私立 5 学部以上」の 6 つの区分を設定した。

評価材料(a)～(g)のそれぞれについて、4 段階評定による回答を従属変数、6 つの属性を独立変数とする Kruskal-Wallis 検定²⁾を行った。その結果 5%水準で属性による有意差が認められた評価材料については、図中の項目に「#」印を付した。

汎用的な能力を評価すると想定した場合（図 4、6），総合型選抜においても学校推薦型選抜においても(a)共通テストは属性により平均値に有意な差が見られ、国立では平均値がそれぞれ 3.0、3.1 であるのに対し、私立ではいずれも 2.5 以下であった。(d)、(e)、(f)については属性によらず平均値が高かった。中でも(f)面接、口頭試問は、どちらの選抜においてもすべての属性で平均値が 3.5 より高かった。

教科・科目に関する学力を評価すると想定した場合（図 5、7），どちらの選抜においても、(a)共通テストについては属性により平均値に有意な差が見られ、国立では平均値がおよそ 3.5 と高い値であった。(b)教科・科目別テストについては、どの属性においても平均値が 3.0 以上と高く、私立 3・4 学部や私立 5 学部以上では 7 つの評価材料のうち最も平均値が高かった。一方、私立 1 学部および私立 2 学部で最も平均値が高かったのは(f)面接、口頭試問であった。

3.2 試験のタイプについて（QB-3、QB-4）

3.2.1 質問文

QB-3 と QB-4 では、知識・技能、思考力・判断力・表現力等を評価するための試験として (a)～(d)の 4 種類の試験のタイプを設定した。QB-3 では各試験のタイプが大学個別のテストに向いているかどうかについて回答者の考えに当てはまる程度をそれぞれ「1. 向いていない」「2. あまり向いていない」「3. やや向いている」「4. 向いている」の 4 段階評定で尋ねた。QB-4 では各タイプの試験を実施しているかどうかを尋ねた。質問文は次の通りである。

QB-3. 知識・技能、思考力・判断力・表現力等を評価するための試験としていくつかのタイプが考えられます。貴大学の総合型選抜や学校推薦型選抜における大学個別のテストとして、下記の(a)～(d)の各タイプが向いているかどうかをお尋ねします。各タイプの試験を実際に課しているかどうかに関わらず、あなたの考えに当てはまる程度を選抜区分ごとに一つずつ選択してください。

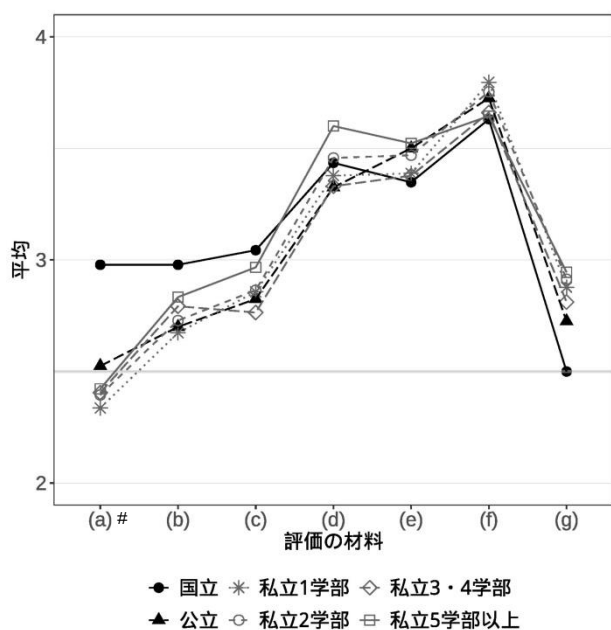
QB-4. 貴大学の総合型選抜や学校推薦型選抜で実施している試験で、下記の(a)～(d)の各タイプに該当するものがあれば、選抜区分ごとにすべて選択してください（複数選択可）。該当するものがない場合は「(e) 該当するものはどれも実施していない」を選択してください。

- (a) 教科・科目別試験を実施する
- (b) 複数の教科・科目に関する設問が収録された問題冊子から、一定数の設問を選択して解答することを課す
- (c) 履修を前提とする教科・科目を明示した上で、それらに関連する汎用的な能力を評価するための問題を出题する
- (d) 履修を前提とする教科・科目を明示せずに、汎用的な能力を評価するための問題を出题する
- (e) (a)～(d)に該当するものはどれも実施していない

3.2.2 試験のタイプの向き不向き

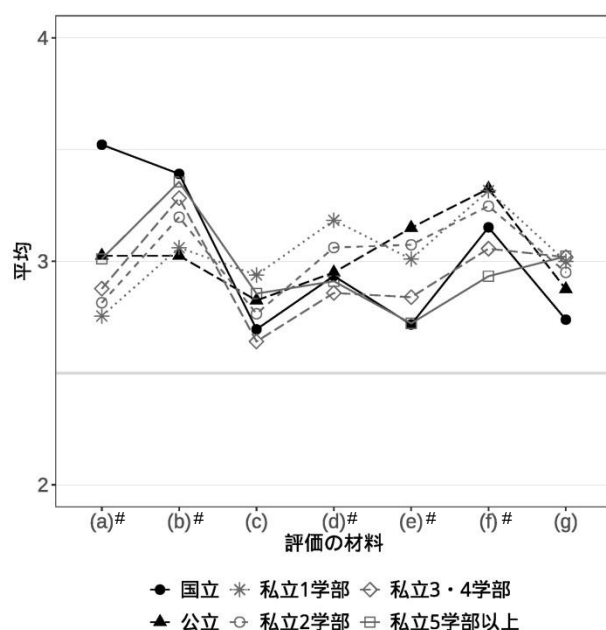
QB-3 の 4 段階評定による回答を間隔尺度とみなして、各試験のタイプに対する評定の平均値を総合型選抜、学校推薦型選抜別に算出し、プロットした（図 8）。

教科・科目に関する問題を課す(a)，(b)よりも汎用的な能力を評価する(c)，(d)の方が平均値が高かったが、(a)～(d)の平均値は、総合型選抜では 2.4～2.9、



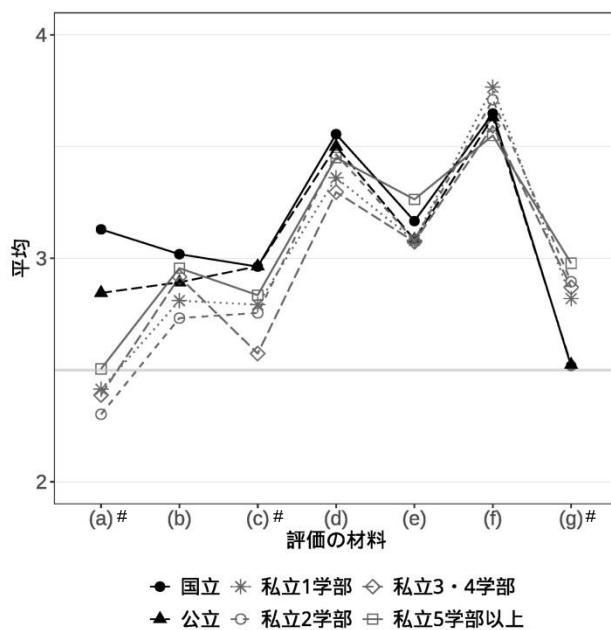
(a) 共通テスト (b) 教科・科目別 (c) 非教科型 (d) 小論文
(e) プレゼン (f) 面接 (g) 資格試験

図 4 汎用的な能力を測定すると想定した場合の属性別にみた評価材料の適切さ（総合型選抜）



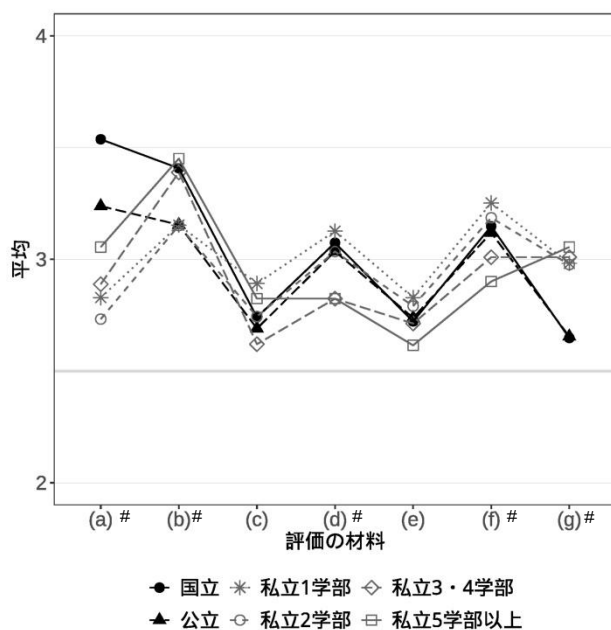
(a) 共通テスト (b) 教科・科目別 (c) 非教科型 (d) 小論文
(e) プレゼン (f) 面接 (g) 資格試験

図 5 教科・科目に関する学力を測定すると想定した場合の属性別にみた評価材料の適切さ（総合型選抜）



(a) 共通テスト (b) 教科・科目別 (c) 非教科型 (d) 小論文
(e) プレゼン (f) 面接 (g) 資格試験

図 6 汎用的な能力を測定すると想定した場合の属性別にみた評価材料の適切さ（学校推薦型選抜）



(a) 共通テスト (b) 教科・科目別 (c) 非教科型 (d) 小論文
(e) プレゼン (f) 面接 (g) 資格試験

図 7 教科・科目に関する学力を測定すると想定した場合の属性別にみた評価材料の適切さ（学校推薦型選抜）

学校推薦型選抜では 2.5～2.9 の範囲であり、いずれも「3. やや向いている」より低い値であった。

3.2.3 試験のタイプの実施割合

QB-4 の結果を用いて各試験のタイプを実施している割合を総合型選抜と学校推薦型選抜別に図 9 に示した。

総合型選抜と学校推薦型選抜とで同じような傾向であった。比較すると(a)は学校推薦型選抜の方が実施割合が高かったが、それ以外の(b), (c), (d)は総合型選抜の方が実施割合が高かった。「(e) 該当するものはどれも実施していない」を選んだ大学の割合は、総合型選抜では 41.4%, 学校推薦型選抜では 37.1% であった。

3.2.4 QB-3 の評定ごとにみた試験のタイプの実施割合

図 10, 11 は, QB-3 の評定 (1～4) ごとに, QB-4 で「実施している」と回答した割合を試験のタイプごとにプロットしたものである。総合型選抜について見ると (図 10), どの試験のタイプについても, QB-3 で「1. 向いていない」「2. あまり向いていない」と回答した大学での実施割合は低いが, 「3. やや向いている」「4. 向いている」と回答した大学での実施割合は順に高くなっている。「4. 向いている」と回答した大学での実施割合は, (a)と(d)が 5 割を超えており, (c)が 3 割強, (b)が 2 割弱であった。学校推薦型選抜についても同様の結果であった (図 11)。

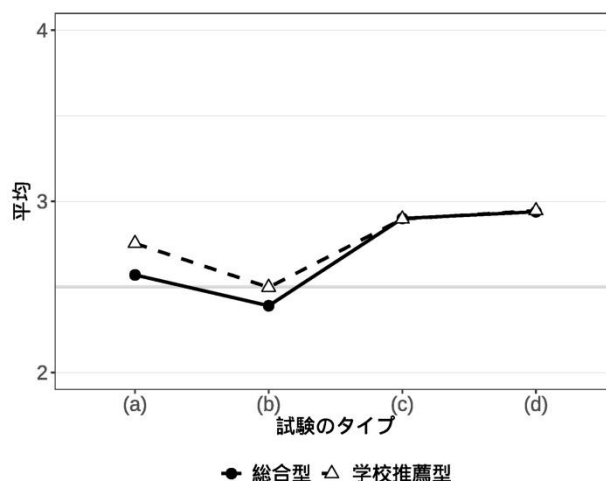
4 考察

4.1 評価材料としての適切さ

QB-1, QB-2 では, 汎用的な能力を評価すると想定した場合と教科・科目に関する学力を評価すると想定した場合について, 選抜区分 (総合型選抜, 学校推薦型選抜) 別に 7 種類の評価の材料の適切さの度合いを尋ねた。選抜区分による違いを見たものが図 1, 2 であり, 評価する能力による違いを見たものが図 3 である。

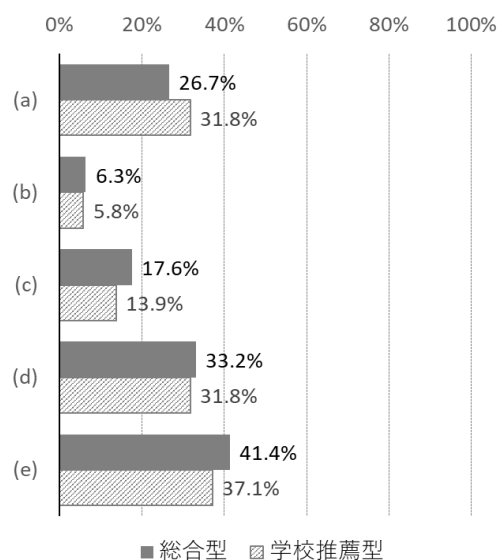
選抜区分による違いを見ると (図 1, 図 2), 評定の平均値は汎用的な能力を評価すると想定した場合の (e)プレゼンテーションを除いて, 違いは小さかった。

学校推薦型選抜において(e)プレゼンテーションの平均値が低い結果であったが, 実態調査でも学校推薦型選抜においてプレゼンテーションを課す割合が低い結果であった (荒井ほか, 2023) ³⁾。需要調査では適切さの度合いを尋ねており, 実態調査では課しているかどうかを尋ねているため, 結果を直接比較すること



(a) 教科・科目別の試験 (b) 複数の教科・科目を含む試験
(c) 教科・科目を明示した汎用的な能力を評価する試験
(d) 教科・科目を明示せずに汎用的な能力を評価する試験

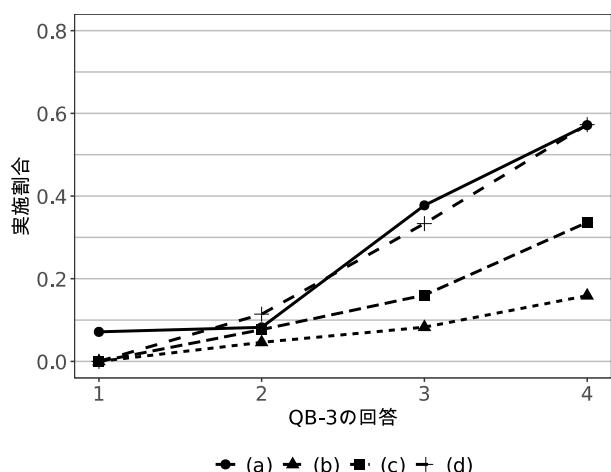
図 8 各試験のタイプについての向き不向き



(a) 教科・科目別の試験 (b) 複数の教科・科目を含む試験
(c) 教科・科目を明示した汎用的な能力を評価する試験
(d) 教科・科目を明示せずに汎用的な能力を評価する試験
(e) どれも実施していない

図 9 各試験のタイプの実施割合

はできないが, 汎用的な能力を評価すると想定した場合に(e)プレゼンテーションの平均値が低いことは, 実際の選抜で課されている割合が低いことと関係していると考えられる。需要調査の質問文ではセクション B の冒頭に「貴大学の実態を踏まえたあなたの考え等をおうかがいします」と記されているため, 回答者の所属する大学で実際に用いられている評価材料に対しては適切さを高く評価し, 用いられていない評価材料



- (a) 教科・科目別の試験 (b) 複数の教科・科目を含む試験
(c) 教科・科目を明示した汎用的な能力を評価する試験
(d) 教科・科目を明示せずに汎用的な能力を評価する試験

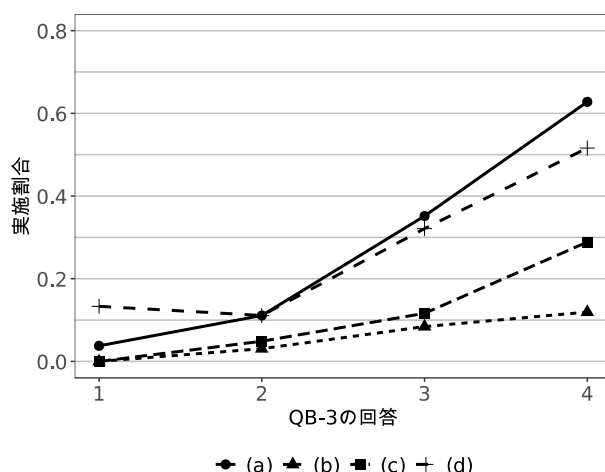
図 10 QB-3 の回答別にみた各試験のタイプの実施割合（総合型選抜）

に対しては適切さを低く評価した可能性がある。

評価する能力による違いを見ると（図 3），汎用的な能力を評価すると想定した場合には(d)小論文，(e)プレゼンテーション，(f)面接，口頭試問の平均値が高かったのに対し，教科・科目に関する学力を評価すると想定した場合には(b)大学個別の教科・科目別テストの平均値が高かった。評価材料としての適切さは，選抜区分による違いよりも，評価する能力による違いが大きいことが分かった。

4.2 属性別に見た評価材料の適切さ

属性別に大学を6つに分けて評価材料の適切さの違いを見ると（図 4～7），(a)大学入学共通テストにおいて，国立大学での平均値が高く，それ以外の公立や私立大学の平均値は低かった。2021 年に実施した実態調査の分析によれば（椎名ほか，2023），総合型選抜や学校推薦型選抜で共通テストを利用している大学の割合は，設置形態によって大きく異なっており，国立での利用割合は，総合型選抜，学校推薦型選抜の順に 67.2%，77.8%であったのに対し，公立では 21.1%，39.2%，私立ではわずか 2.6%，1.7%であった。また，公立や私立大学が総合型選抜や学校推薦型選抜で共通テストを利用する際には，試験の実施日程や成績の提供日程の問題が大きい。椎名ほか（2023）の分析結果を踏まえると，共通テストの評価材料としての適切さが私立や公立では低い評価であるのは，共通テスト



- (a) 教科・科目別の試験 (b) 複数の教科・科目を含む試験
(c) 教科・科目を明示した汎用的な能力を評価する試験
(d) 教科・科目を明示せずに汎用的な能力を評価する試験

図 11 QB-3 の回答別にみた各試験のタイプの実施割合（学校推薦型選抜）

の利用割合が低いこと，また，共通テストの利用には日程的な難しさがあるためと考えられる。

4.3.4 種類の試験のタイプについて

QB-3，QB-4 では，4 種類の試験のタイプを想定して，向いているかどうか，実施しているかどうかを尋ねた。4 種類の試験ともに評定の平均値は 2.5～2.9 程度であり，「3. やや向いている」よりやや低い値であった（図 8）。試験のタイプ別に比較すると，(a)，(b)の教科・科目に関する試験よりも(c)，(d)の汎用的な能力を評価するための試験の方が比較的向いていると考えられていた。

各試験のタイプの実施割合を見ると（図 9），(a)と(d)が約 30%の大学で実施されていた。教科・科目に関する試験では教科・科目別の試験(a)が，汎用的な能力を評価するための試験では履修を前提とする教科・科目を明示しない試験(d)が多く実施されていた。

また，4 種類の試験のタイプのいずれも実施していない大学が両選抜区分ともに 40%程度存在した。この約 40%の大学では，総合型選抜，学校推薦型選抜では試験を実施せず，小論文やプレゼンテーション，口頭試問等の試験以外の評価材料を用いて知識・技能，思考力・判断力・表現力等の評価を行っているのだろう。

QB-3 の評定（1～4）ごとに，QB-4 で「実施している」と回答した大学の割合を試験のタイプごとに見

てみると(図 10, 11), 「1. 向いていない」から「4. 向いている」になるにつれて実施割合が高くなっていた。「1. 向いていない」と回答した試験のタイプでは実施割合が低く, 「4. 向いている」と回答した試験のタイプでは実施割合が高いのは妥当な結果である。しかし, 「4. 向いている」と回答した試験のタイプであっても, (a), (d)の実施割合が5~6割程度, (c)が3割強, (b)が2割弱であり, 自大学に向いているかどうかと, 実際に試験を実施しているかどうかの間に差が見られた。

5 まとめと今後に向けて

本論文では, 需要調査から得られた回答を分析した結果を報告した。汎用的な能力を評価する場合には小論文, プレゼンテーション, 面接, 口頭試問が, 教科・科目に関する学力を評価する場合には大学個別の教科・科目別テストや面接, 口頭試問が適切であると考えられていた。国立大学ではどちらを評価する場合でも共通テストへの評価が他の属性と比較して高かった。試験のタイプ別に見ると, 教科・科目別の試験と履修を前提とする教科・科目を明示せずに汎用的な能力を評価する試験が3割程度の大学で実施されていた。自大学の入試に向いていると考えられている試験のタイプであっても, 4割程度の大学は実施していなかった。これら4割程度の大学には何らかの支援を提供する余地が潜んでいる可能性がある。

今後は, このような大学を中心に大学の属性別の分析や, 質問間の関連性の分析等をより進め, 教科・科目別の試験や汎用的な能力を評価するための試験に関してどのような支援のあり方が可能か, 検討を行っていきたい。

注

- 1) 調査は, 大学入試センター理事長裁量経費研究(令和3~5年度)「大学で学ぶための基礎的学力の新たな評価測度の開発に関する研究」(代表者: 椎名久美子)の一環として実施された。
- 2) 4段階評定による回答について, 特定の分布形を仮定せずに検討するために, ノンパラメトリックな一元配置分散分析法であるKruskal-Wallis検定を行った。
- 3) 実態調査の結果では, 総合型選抜, 学校推薦型選抜とともに, 小論文, 口頭試問は50%以上の大学で課されていたのに対し, プレゼンテーションについては総合型選抜では57%と高かったが, 学校推薦型選抜では11%であった。

謝辞

需要調査の回答に御協力くださった大学の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 荒井清佳・伊藤圭・椎名久美子・桜井裕仁・大塚雄作・花井渉(2023). 「令和3年度の総合型選抜・学校推薦型選抜における知識・技能, 思考力・判断力・表現力等の評価資料の利用実態」『大学入試研究ジャーナル』33, 226-232.
- 大学入試センター研究開発部(編)(2023). 令和3~5年度理事長裁量経費研究報告書「令和3年度大学入学者選抜における選抜資料の利用状況に関する実態調査」, 大学入試センター <https://www.sakura.dnc.ac.jp/archivesite/wp-content/uploads/2023/10/Report2022-09.pdf> (2024年7月24日).
- 伊藤圭・椎名久美子・荒井清佳・桜井裕仁・大塚雄作(2025). 「問題バンクを利用した入学者選抜試験の導入と出題に関する意識」『大学入試研究ジャーナル』35, (印刷中).
- 文部科学省(2018年10月22日). 「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告の改正について(通知)」文部科学省 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/11/06/1397731_03.pdf (2024年7月24日).
- 文部科学省(2020年6月19日). 「令和3年度大学入学者選抜実施要項」文部科学省 https://www.mext.go.jp/content/20210208-mxt_daigakuc02-000005144_03.pdf (2024年7月24日).
- 文部科学省(2023). 令和4年度文部科学省委託調査「大学入学者選抜の実態の把握及び分析等に関する調査研究 調査報告書」(株式会社リベルタス・コンサルティング) 文部科学省 https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1418400_00001.htm (2024年10月31日).
- 文部科学省(2023年6月2日). 「令和6年度大学入学者選抜実施要項」文部科学省 https://www.mext.go.jp/content/20230719-mxt_daigakuc02-000005144_10.pdf (2024年7月24日).
- 椎名久美子・荒井清佳・伊藤圭・桜井裕仁・大塚雄作・花井渉(2023). 「令和3年度大学入学者選抜における大学入学共通テストの利用実態および大学からの評価」『大学入試研究ジャーナル』33, 67-73.
- 椎名久美子・荒井清佳・伊藤圭・桜井裕仁・大塚雄作(2025). 「個別入試における問題作成の手引きの必要性に関する認識—大学の入試担当者へのアンケート調査を通して—」『大学入試研究ジャーナル』35, (印刷中).